

人生の一本勝ちを選択した、 もう一人のサムライ

「カーロスは、引退せしモニターを開き、 いの一番にモニ・アイザックに感謝の 意を表すべきだ」

最近ではやや黒星が先行しているが、器用に日本語を操り、試合に勝つと漫画ドラゴンボールの主人公が繰り出すポーキングが、すっかりお馴染みとなったカーロス・ニュートン。彼の勇姿を目にして、古くからの総合格闘技ファンは、ある選手のことを思い浮かべることが、多々あるのではないだろうか。

ニュートンがVTV97で衝撃的な日本デビューを飾り、翌年3月に再来日を果たした際、佐藤ルミナの対戦相手として、初来日を果たした選手、ジョエル・ギャルソンのことを。



日の出の勢いにある佐藤ルミナを破ったジョエル・ギャルソン。サムライ・クラブの盟友カーロス・ニュートンとともに総合格闘技界にセンセーショナルな巻き起こした。

当時、サムライ・クラブというトロント郊外にある道場に所属していたニュートン。イスラエル人モニ・アイザックを師に持つ二人は、ブラジリアン柔術とは一線を画した組み技の使い手だった。

まるで古流柔道ともいうような表現が当てはまる、投げ技を軽視しない、「待て」もない寝技を駆使するスタイルは、イスラエルの戦術武術をも体得しているアイザックの長年の鍛錬の成果だ。彼は二人の才能溢れる愛弟子にその全てを伝授していた。

この日、ニュートンは草柳和宏のアームロックを切り返し、ギャルソンはルミナを投げ捨ててから、腕ひしぎ十字を極めて勝利を掴んだ。「ボールになりたい」、「宮本武蔵を尊敬している」、人懐っこい笑顔と巧みな話術で、人を惹きつけてやまないニュートンとは対照的に、ギャルソンは感情表現が不得手で、口数こそ少なくないが、なかなか自分の思ったことを言葉にできない青年だった。父親がトロント大学の教授、母親も学校の教師という家庭に育ったギャルソンは、ルミナを破った当時は現役の大学生。労働関係の専門課程を選択していた。「人間性を読むのは、ビジネスも格闘技も同じだから」と、専攻理由を語ったギャルソン。

1998年、修斗公式戦で10デビュー以来連勝中だった佐藤ルミナに初めて黒帯をつけた無名のカナダ人選手がいた。ジョエル・ギャルソン。いわゆる今流のMMAワールドではなく、武術系の香りを匂わせていた彼は、総合戦績1勝1敗という戦績だけを残し、リングを去った。旧友カーロス・ニュートンは、その後、ローニンとなり地位と名声を手にしたが、ギャルソンはサムライのまま、師に仕え指導者となる道を選択した。

Joel Gerson ジョエル・ギャルソン

1974年10月30日 カナダ・トロント出身
98年3月初来日。プロ修斗のリングで佐藤ルミナに一本勝ち。8月にはブラジリアン柔術黒帯のヒカルド・ポテリヨと名勝負を繰り広げた。MMA通算成績は1勝1敗。現在は自らの道場「エッジ」で指導に専念する。

Joel Gerson

Text by Manabu Takashima Special Thank to Nippon Sports Publishing

彼はその5ヶ月後に同じくプロ修斗のリングで、柔術黒帯ヒカルド・ポテリヨと対戦し、年間最高試合と絶賛された高度な組み技合戦の末、判定負けを喫した。この150日間に経験した2つの試合が、彼にとって終生のMMAキャリアとなる。

ルミナを破った実績から、ウエルター級チャンピオン宇野薫への挑戦権を持ちながら、修斗のリングに戻ることはなかった。

「だから言えるけど、あのとき、宇野との対戦をPRIDEからオファーされていたし、UFCからも声が掛かっていた」。30歳を迎えたギャルソンは、まるで噂話をするかのように小声で話し始めた。

「でも体重70kgに満たない僕が、MMAの世界で成功しても、一生暮らしていけるようなファイトマネーを得ることなんて、無理だっけ分かってた」

リングでの夢を簡単に諦められたわけではない。ただ、ギャルソンは一流企業で働く優秀な頭脳と、師アイザックの下で、大好きな組み技格闘技を学べる夢を持っていた。

MMAの世界に残るか、すっぱり足を洗った。サムライ・クラブを離れたニュートンは、自らをローニンと呼ぶようになった。「カーロスは師匠を失ったから、ローニンになったんじゃない。自ら離れたんだ。僕は手取り足取り技を指導してくれたモニを裏切ることなんてできなかった」とギャルソンは言う。かつて天才とたたわれた旧友に対し、ギャルソンは嫌悪感を持っていることを隠そうとしない。

「カーロスは、もう限界だ。ファイターは引退する時期を見誤ってはいけない。引退せしモニの際には、一度も感謝の意を表したことがないモニに頭を下げて、リングを下りるべきだ」

口下手な彼の口をついて出てくる言葉は、全て本心ばかりだ。MMAのリングを去ってから、「人の心を読むのが好き」だったギャルソンは銀行や電子機器メーカーに人材を紹介するヘッドハン



柔道、柔術、イスラエル武術などの指導を自らの道場「エッジ」で行う現在のギャルソン。少し、がっしりした体型になったようだ。

ティンクの会社に勤務するようになった。リング上や畳の上で楽しんできた心の読みあいをビジネスにしたのだ。そして、どんなに忙しくても、サムライ・クラブの指導だけは続けていた。ローニンはなく一生、恩師アイザックのサムライであることを心に近い、MMAへの未練を断ち切っていた。

サムライは3年前から生活を指導一本に絞った。04年9月1日に、自らの道場「エッジ」もオープンし、MMAよりも、会社勤めよりも好きだった指導に追われる日々を送っている。

エッジには柔道、柔術、ムエタイ、空手、イスラエル・サバイバル術など多くのクラスがあり、組技の授業はほとんど彼の受け持っている。ただ、だからといって、指導に専念しているわけでもない。「指導以外？ ジムの経営に頭を使っているんだ。どうやって、ジム経営を拡大していくか。生徒の数が増えれば増えるだけ、教える方はやりがいを感じることもできる。それだけ僕の人生も幸せになる。僕はボルシエを乗り回すことが幸福だなんて思ったことは一度もない。指導を通して、人間関係を築いていく。そして道場経営も軌道に乗せる。リング上の勝利がどれくらい期間、人間を幸せにしてくれるだろうか。僕は人生という舞台で勝者になりたかったし、なろうと努力を続けている」。サムライを続けることで、安住の地を見つけたジョエル・ギャルソンは、一生をかけて一本勝ちを狙い続ける。